



名古屋市立大学 大原 弘隆 新学長 インタビュー

名古屋市立大学（名市大）の学長に大原弘隆氏（前名市大医学部附属西部医療センター病院長）が4月1日付で就任した。任期は4年。同大教授から名古屋市の局長に就き、市と大学間の調整を行い、人脈を広げた。そして医療現場のトップから大学の教育研究を統括する立場に。少子化、AI（人工知能）と社会環境が激変する中で、公立大学初の中高一貫校の開設準備を進めつつ、どう人材育成をしていくのか。大原新学長に抱負などを聞いた。

7学部の横断的教育で「幅広い専門知識を持つ人材育成に努めたい」

—学長ご就任、おめでとうございます。抱負をお聞かせください。

大原弘隆・名古屋市立大学学長 世界中の大学を取り巻く環境が今、大きく変化しています。米国ではトランプ大統領が様々な大学にプレッシャーを与えて留学生が減少し、中国では大学が増えたためか卒業生がなかなか就職できないと言われています。日本に来る留学生は増え、大学を出て日本で就職したいという流れも出てきました。一方、日本の少子化は深刻で、入学希望者が募集定員を下回る状況で、大学の将来が危惧されています。名市大は私の母校でもあり、学長としてさらに社会から認められ、学生に選ばれる大学にしていきたいと思っています。

—貴学の魅力は。

大原学長 大学の魅力を最大限活用しながら新たな強みを生み出していく必要があります。強みとは、75年の歴史を持つ7学部、8研究科の総合大学であること、大都市の名古屋市内にあること、学生、教職員、卒業生の社会貢献度がとても高いなどが挙げられます。また、現在進行形ですが、滝子、田辺通（いずれも瑞穂区）のキャンパス再整備が進んでいて、完成すると、さらに魅力が増えると考えています。

—教職員へのメッセージで強調したい点は。

大原学長 伝えたいのは、長期的な展望を見据えながら教職員と一丸となって教育・研究、

医療・業務運営に取り組んでいきたいという思いです。組織運営では本学に集う誰もが誇りと愛着を持ち、安心して研究・教育活動、医療活動に専念できるよう努め、「知の創造の拠点」として発展させるため時代に応じた改革・改善を積極的に実施していきたい。教育ではそれぞれの分野の専門知識に加え、学部横断的な学習により、学生に広い視野を身に付けてほしいと思っています。

—横断的学習の具体例は。

大原学長 例えば医学部や看護学部の学生にデータサイエンス部で学ぶ機会があればどうなるでしょう。逆に、西部医療センターでは最近、データサイエンス学部の学生が病院での実習において、医療費のより効率的な計算方法を提案してくれました。また、がん患者さん、特にAYA世代（※編注1）の患者さんにおいて、毎年何人くらいの妊孕性（※編注2）を温存できるかを調査して、放射線治療や化学療法をする前に精子や卵子を預かるべきケースの実態を明らかにしてくれました。各学部の学生が医学、薬学、看護学、リハビリ学とデータサイエンス学、経済学、人文社会学、芸術工学などの専門的知識を相互学習することで、より幅広い知識を持つ優れた人材が育つと思います。

—名市大医学部附属病院の6病院群は国内最大級ですね。

大原学長 はい。6附属病院群で合計2,223

（※編注1）AYA世代：Adolescent and Young Adultの略で、「思春期・若年成人」を意味する。一般的には15歳から30代、または15歳から39歳までと定義。

（※編注2）妊孕性：妊娠するために必要な能力のことで、女性と男性どちらにも関係するもの。